

アメリカ農業拡張事業史における「農民協同実演事業」の再検討

佐々木 保孝

はじめに

アメリカ合衆国の農業拡張事業 (Agricultural Extension Work) は、大学の組織的な構外教育活動として長い歴史を有し、現代大学開放の源流のひとつとみなされている。また、住民中心の学習活動を核にした地域の課題解決を志向しているところから、生涯学習社会における大学のあり方を考える上でも示唆に富む事例である。アメリカ農業拡張は 19 世紀の第 4 四半期から本格的に展開しはじめ 1920 年頃までには制度的な原型が完成をみる、本稿はその成立史研究の一環に位置づくものである。

課題の設定にあたって、歴史的な事実を確認しておこう。農業拡張事業の制度化の過程をみると、1914 年に連邦議会でスミス・レーバー法が可決され、連邦農務省と各州の国有地付与大学の農学部 (Agricultural College) との間で交わされた覚え書きによって、農学部には州の農業普及のための教育を運営する権限が与えられた。スミス・レーバー法は、ニューヨーク、ウィスコンシン、ミシガンなどアメリカ中西部から東北部に位置する農学部が行ってきた農業拡張事業を歴史的な母胎として、アメリカ農学部・農事試験場連盟を中心とした国庫の支出を求める運動が結実して成立したものであった。制度化された事業の仕組みは「協同拡張事業 (Cooperative Extension Service)」と呼ばれた。

この「協同 (Cooperative)」という語は、歴史的には 1903 年にナップ (Knapp, S.A. 1833-1911) によって創始された「農民協同実演事業 (Farmers' Cooperative Demonstration Work)」に由来している。ナップは、テキサス、ルイジアナ、ミシシッピ、アラバマ等、アメリカ南部を中心にこの事業を展開した。古典的な歴史書であるトゥルー (True, A.C.) 著『合衆国における農業拡張事業の歴史』では、農民協同実演事業にひとつの章が割かれ、ナップが連邦農務省の南部農業推進特別監督官として事業を進めたことが記されている (True 1928)。ここで、ひとつの素朴な疑問が浮かぶ。なぜ、大学がおこなう農業拡張事業の制度化にあたって、ナップが推進した事業の冠である「協同」という語が引き継がれたのであろうか。というのも、実は、農民協同実演事業には、大学が組織的に関与してはいなかったのである。

理由のひとつには農民協同実演事業の管轄は連邦農務省であり、農業拡張事業の制度化にあたって国庫が支出される状況で、命名には連邦の意向がはたらいたということがあるかもしれない。それはあるにしても、では名称だけがお飾りで継承されたのかと言えばそれも事実とは異なる。多くの先行研究が指摘しているように、農民協同実演事業に反映されたナップのアイデアは、その後の拡張事業にも引き継がれているからである。主要なものとしては 2 点あり、ひとつには、ナップが強力に押し進めた実物教授 (object lesson)

による教育方法でもって農民たちの農園で実演をするという教育方式がある。もうひとつには、農民たちの農場を訪問して農業指導を行うエージェントであるとか、地域において農業体験を通じた学びをおこなう少年少女クラブの設置など、事業の実地システムに関する側面である（Westwood 1972、Pigg 1983、佐々木 2001a、Peters 2002、Bull 2004等）。

しかしながら、これら2点に関してもよく考え直してみなければならないことがある。まず、実演方式についてであるが、「実物教授」とは、ごく単純化して言えば「やってみせる」ということである。新しい農法等に関しては座学で学ぶよりも実地で見せてもらった方がわかりやすい。これは非常に大切なことではあるけれども、当然といえば当然の気もする。実際、大学側の事業においても、大学構内を飛び出した巡回実験などは早くから行っていて、研究成果を人々の前に披露していた。一方、ナップ自身も、実演方式については、70歳を過ぎて着手した「農民協同実演事業」よりも遙か以前から実践していたと語っている（Knapp 1906）。つまり、そんなに珍しいものでもないだろうというわけである。では、なぜ農業拡張事業史においては、「農民協同実演事業」の教授方式に注目が集まるのか。

事業の実施システム形成史についても看過されている点がある。トゥルーの指摘によれば、大学側は、農民協同実演事業の実施当時、自分たちの事業対象地域に連邦農務省からのエージェントがやってきて、大学の助言もなしに農業指導が行われている状態を快く思っていなかった（True 1928、p.71）。それでも、時代が下れば、事業システムとしてエージェントの役割は拡張事業の肝と言っても過言ではないほど重視されるようになった（佐々木 2005）。大学側はエージェントが農民の生活の中に入り込んで農民のニーズに添った教授活動をした点にその効果を認めて取り入れたと思われるが、単なる現地技術指導員ということであれば、やはり思いもつかないアイデアというほどではない。ナップが画期的だったのは、農民を直接指導する者の重要性を認識し、それを「エージェント」としてシステム化しようとした点であろう。しかし、なぜそのような発想に至ったのかという点はまだ十分に解明されているとは言い難い。

総じて言えば、大学の参加のないところで形成された実践原理がなぜ後世の大学の実践に影響を与えることとなったのかという点が本稿の問題関心である。そこで、ナップの論考に関する分析を中心に、農民協同実演事業について再検討をおこないたい。具体的には、まず、ナップと大学の間を軸にして事業の歴史的な位置づけについて再考し、そこで得た視点から、上述した教授方式とエージェントの問題についても言及していくこととする。

1. アカデミズムとナップの成人教育活動

本稿での課題を考える際の研究上の背景として、社会の中で展開される人びとの学習活動に対する大学の関わり方をめぐる問題がある。学会でも、現代大学開放の歴史的なター

ムとしての大学拡張の定義について、大学の主体的・組織的な事業であることをその要件とみなすかどうかという議論がなされてきた(小池、佐藤 2004)。その中には、わが国の自由大学運動のように大学の組織的な関わりが無い高等教育レベルの成人教育活動を、カウンターパートとして大学拡張の枠組みに含める立場もある。しかしながら、大学の有する資源と民衆のニーズの架橋が生涯学習社会の重要課題のひとつであるとすれば、やはり大学が組織としてどれだけ本気でことにあたり、必要な措置を制度化できるかという問題は大きい。わが国の場合は、高等教育レベルに多様な実施主体がいるという社会的な認識も薄く、散発的に発生する有志の取り組みがたとえ優れたものであっても、それらに関連づけて新たな枠組みを構築するような実践も研究も未だ蓄積をみていない。その意味でも、アメリカ合衆国における農民協同実演事業の歴史的展開は示唆に富むものと言えるだろう。

大学と社会について考えたとき、大学に向けられる批判の最も鋭いもののひとつは、象牙の塔といわれるように、社会に目を向けることのないネガティブな意味でのアカデミズムの問題である。これは、単に大学から社会に出ないというレベルの他に、外に向いたとしても、その活動が理論的・学問的な形式と権威に依存して、社会のニーズに合わないという事態を招くことが多い。アメリカ合衆国においてスミス・レーバー法の議論が始まった際にも、連邦農務省の側の懸念はこの点にあったといわれる(True 1928, p.71)。ただ、ややもすると、社会(民衆)の側の学問研究への理解不足や偏見という要素もあり、大学が農業拡張事業に取り組む際にも、農学研究の成果に農民が目を向けてくれるにはどうすればよいのかということに苦心していた(佐々木 2007)。では、ナップは大学(農学部)に対して全くの門外漢で理解のない人物であったのかといえばそうではない。むしろ、彼はアイオワ州立大学で農学教授・学長を務めたほどで、農業拡張事業史上ある重要な役割も演じている。いったいどのような人物であったのだろうか。

ナップは、1833年にニューヨーク州で生まれ、ユニオン大学を卒業後、アカデミー(大学予科)での教職や女子大の経営参加など教育畑を歩む。しかしながら、ケガの療養をきっかけに、教員を辞してアイオワ州に移住後、農園をはじめ。一時、州立盲学校の校長も務めたが、アイオワ州では家畜の品種改良を中心に活動を始め、1879年にはアイオワ州立大学の農学教授に就任。7年間、大学人としても活動した。転機は1886年に農学部を辞してルイジアナ州に移ったことである。ここでは、当初、北部からの開拓農民を斡旋する会社で、農地現場の開墾指導等をしてしたが、やがて自ら会社を興し、米作を中心としたルイジアナ州の農地開発事業に尽力した。それまでの人脈で連邦農務省とのパイプを築いたナップは、連邦農務省から、米の品種改良に関する研究を依頼され、日本や中国などアジア各地にも出向いている。そうした実績が評価され、連邦農務省の南部農業推進特別監督官に就任した。1903年に農民協同実演事業を開始した時ナップはすでに70歳で、1911年に死去するまでの晩年をこの事業に捧げたのであった。(Bailey 1971)

こうしてみると、ナップには、教師、農民、大学人、経営者などいろいろな顔があることが分かる。農民協同実演事業は、彼のキャリアの集大成のようでもある。そのナップが、当時のアメリカにおける農業教育に対して下した評価は次のようなものであった。「連邦農務省、農学部、農事試験場、農業広報誌、ファーマーズ・インスティテュート、連邦あるいは州の農業紀要などは、長年にわたって農業に関係するいろいろなトピックを発信してきた。これらは情報を集めようとする進歩的な農民たちの大きな助けとなってきたが、特に南部において、大衆にはほとんど影響を与えなかった。」(Knapp 1906, pp.8-9)留意したいのは、ナップの得意とするところの品種改良技術は最新の農学研究の成果に負うものであったし、彼は農業科学の価値は大いに認めているのである。つまり、上述の評価は、農学研究とその普及教育をおこなう農学部をはじめとするアカデミズム(の体質)に向けられたものと解するべきであろう。

大学のアカデミズムは人文主義的な教養教育に淵源をもち、欧米のカレッジ教育では、ギリシャ語やラテン語を中心とした古典の教育も長く重視されてきた。それに加えて、19世紀を通じて科学研究を担う場の中心に大学が躍り出ると、周囲との隔絶した関係の中で自らの研究テーマに没頭するというカルチャーも大学の中で強くなっていく。農学の分野においても、19世紀の後半に至って、ヨーロッパにおける化学実験をもとにした知識開発が急速に進んだ。アメリカにおける農事試験場の設立運動に大きな役割を果たしたのも、母国の貧弱な実験環境を嘆いたヨーロッパ留学帰りの気鋭の研究者たちであった。見方を変えれば、科学上の新たな知見の発見に全力をあげて研究に没頭すればするほど、その知見の社会的有用性には目を向けない性向をもつことになる。ナップが、アイオワ州立大学に在籍したまさに大学人であった時代、痛烈に批判したのはこの点であった。彼は次のように述べている。

「多くの科学者は外国の後追いであるとか、あるいは、特別で人を驚かせんがための発見をしようとしていて、農業に関する科学を教えたがらない。彼らは、実践的な応用研究を軽蔑しているのだ。(モリル法でいう)産業カレッジにおいては、植物学者は、農場にある樹木・灌木・穀草・牧草・飼料といったものの管理について研究を進めなければならないし、それらをいかに栽培し、改良するか、また、病害やその対策といったことを提言するべきである。動物学者は、家畜の成育やその履歴、習性といったことに特に注意を払う必要がある。化学者や物理学者は、お高くとまった態度を引っ込めてから、農業と真摯に向き合わなければならない。昆虫学者は、農業に役立つ昆虫の活用方法や害虫の駆除方法について、一般向けに発表すべきである。このようなやり方でいけば、科学は身近なものとなり、世界の労働者の傍らに沿う存在となるだろう。」(Knapp 1885, p.166)

ナップは自身の学生(カレッジ)時代に古典の教育を受け、かなり優秀な成績で卒業し(True 1928, p.58) 最初の教職時代のアカデミーでも古典の教鞭をとった。よって、大学のもつ古典的なカルチャーも理解できないということはなかったであろう。一方で、ユ

ニオン大学時代に長く同校の学長を務めたノット (Nott, E.) が設置した園芸や農業の科目を学んだことを皮切りに、アイオワ州に移住後に飛び込んだ農業の世界ではアイオワ家畜生産者組合 (Iowa Fine Stock Breeders Association) の結成時の会員となったり、*The Western Stock Journal and Farmer* という雑誌を創刊したりするなどの活動をしている。ここで、おそらくは当時のアメリカの農学水準からして、農業科学を振興する必要性を大きく感じたのではないだろうか。このような経緯の中で、ナップは、大学とはそもそもどんなどころで、しかしながら、時代に合わせて何を改革しなければならないのかという青写真を、アイオワ州立大学に農学教授として着任した際にもっていたのではないかと思われる。だからこそ、具体的な行動として、アメリカの農学水準の向上を目指して全米の大学に農事試験場を付設することを謳ったハッチ法 (1887 年成立) の原案を起草したのである。この点は、ナップが農業拡張事業史において果たした役割としてもっと注目されてよい。

それでも、現実の大学改革はナップの思うようには進まなかった。アイオワ州立大学では学長も務めたがその期間はわずかに1年であった。結局、1886年に大学を辞職しているが、ナップの伝記的な研究をおこなった J.C. ベイリー (Bailey, J. C.) は、学内の保守的な勢力にコントロールされた大学理事会の思惑がはたらいた側面もあると指摘する。その上で、ナップの教育に対する姿勢について、ベイリーは次のように指摘している。「ナップが農学部教授を辞するとき述べた言葉には、彼の農業教育の考え方が感じられるものであった。すなわち、大学・クラスルームの壁を越えて、農業の現場にいるすべての人たちに、有用な知識を届けようというものである。ナップは、いわゆる狭い枠組み (narrow-gauge) の学校に属していた。その場所は、教師が提供する教授活動を実践に利用できるようにしたいと考える人たちが構成されていた。しかしながら、実践的な教育というときのナップの解釈は、その視角が非常に民主的で長期に渡るものとして考えられており、狭い枠組み・広い枠組みといったタームの間にあるような合意点は問題とせず(学習している)個人に資するものにしよう、ということであった。」(Bailey 1971, p.105)

ナップの大学改革に対する考え方については、史料的制約から今後もう少し踏み込んで考察すべき課題が多いが、当時の伝統的な観念をもつ大学人の目にはかなりラディカルに映ったことは十分に考えられる。ただし、上記で引用した 1885 年論文の冒頭には、当時、設立から約十数年を経過した国有地付与大学が、その創設を定めたモリル法の精神に沿って発展していない現状が指摘されている。ここには、モリル法の精神は農民にターゲットを絞った農民に役立つ教育を行う機関を創設することではなかったのかという、ある種のもどかしさが横溢している。大学を辞して後のナップの成人教育活動には、たとえ大学が絡んでいなくとも、彼本来の大学観 (ナップの中では民衆大学のイメージに近いように思われる) が随所に反映されたのではないだろうか。

農民大衆のための教育という問題意識は、この時代の先進的な大学人の間には共通して

みられるものであって、例えば、北部の農業拡張事業の中心的な存在であったコーネル大学の L.H.ベイリー (Bailey, L. H.) の農業拡張論からも読みとることができる (佐々木 2001b)。しかし、ベイリーが農学部長として学内に教育・研究・拡張の3機能を定着させるべく体制構築に取り組んだのとは対照的に、ナップは大学の外で活動する道を選んだ。こうした時代状況を踏まえると、農民協同実演事業の歴史的評価にあたっては、まずは、創設者のナップを伝統的な大学のあり方に批判的な目を向けた人物として捉えておかなければならないだろう。それで初めて、農民協同実演事業の実践原理の中で、何が後世の大学へ受け継がれていったのかを問うための視点が得られる。その分析を次節以降におこなっていこう。

2. 実演方式が採用された理由

ルイジアナ州に移った後、ナップが最初に事業の対象としたのは北部からの開拓移住者で、ここでの課題は土地に不慣れな者に、風土に合った品種や耕作方法を伝達することであった。その後、米作地帯の開発で名声を上げたナップは、連邦農務省の南部農業推進特別官としての活動をはじめた。この点は、ナップにとっては大きな変化であった。なぜなら、南部で長い間農民として暮らしていた人びとを対象にした事業運営を迫られることになったためである。南北戦争以後において奴隷解放はなされたが、伝統的な南部農村では、シェア・クロッピング制度(分益小作制度)によって、プランターの土地を黒人や貧農白人による小作が耕作するという状況にあった。その結果、南部農民の貧困状況は殆ど改善されないまま20世紀を迎えていたのである。

長期にわたる貧困が人間形成にもたらす影響を考えると、深刻なものとしては労働意欲の減退、向上心の欠如といったことがある。ナップが直面した問題もまずこの点であった。彼は言う。「もし人びとの経済力 (earning capacity) が食べていくのに最低限度でよいということであれば、進歩は止まり、もっといい家に住もうとか、快適な家を作ろうとか、学校を向上させようなどという、上昇のためのあらゆる志向性を主張することの意味がなくなってしまう。」より端的な認識は、「最貧の人たちの間では、もっと稼げるようになれば家族にまともな服を着せられて、家庭を改良すれば便利さが増すなどと考えている人はほとんどいない」という言葉にあらわれている。(Knapp 1908, p.3)

貧農に接したときのナップの戸惑いがことさらに大きかったのはなぜであろうか。それは、彼のなかに過去に培ってきたやり方では通じないという思いがあったためであろう。たとえば、「黒人の生活状況を改善する取り組みのなかで、我々はしばしば、大所高所から始めてしまい、会話の間も彼等が理解できないことに話しをすすめてしまう」(Knapp 1910, p.4)と述べている。基礎教育の不足は現場で実際に話してみても実感できることであった。さらに、根源的なところでは、ナップの名声を支えていた品種改良とは、農業生産を向上させようという志向性がなければそもそも意味をもたない。言い換えれば、自分

が成してきた仕事の価値から説き起こしていかなければならない状況にあったわけである。

そこで、ナップは貧困層の農民を対象にした教育を問題の中心に据えた。これが、社会的に与えたインパクトは小さくなかったと考えられる。なぜなら、そうした人びとに教育をもたらすという発想自体が当時の社会の中で一般的ではなかったためだ。ナップ自身は、社会の底辺にいる人々の変化がどうすれば可能なのかという問いをたて、「教育の古いシステムは、トップクラスの者にしか目がいていないのだ」(Knapp 1910, p.3)と結論づけて教育の変革を訴えたのである。ナップの基本的な考え方は、下層にいる人びとの底上げが社会の発展につながるというものであった。これは見方によっては、既得権者を侵害することにもつながるが、ルイジアナに移住後の会社経営時代から巧みな弁舌で南部人との良好なパイプを作ってきたこと(Bailey 1971 p.125)、革新主義下において連邦農務省下の身分にあったこと、そして何よりナップの農業改良の実績が社会的に彼の言葉の説得力を高めていたものと思われる。

以上を念頭において、「農民協同実演事業」の中身について検討してみよう。歴史上はじめて実施されたのは、1903年、テキサス州 Terrell に住むポーター氏の農場においてであった。ちょうど50年後の1953年に、Terrell でナップ博士来訪50周年を記念する行事が開かれた折り、当時の訪問記録が資料として作成された。資料は「最初の実演農場であり、現在世界中で拡張事業として知られている実演方式を生んだ日々の記録」と銘打たれている。今回、その記録の事実確認までには至らなかったが、50年後の時点で、ナップの事業をどのぐらい認識できていたのかという点はうかがえるところである。記録によれば、訪問日は、1903年の2月25日～26日、3月24日、10月22日、10月29日、10月31日、11月2日～4日となっている。2月の訪問は事業の概要説明、3月は植え付けについて、10月から11月は収穫の成果の確認と秋作物の植え付けについて、現地でナップが直接農民と話し、指導した(Boyd 1953)。訪問回数は意外に少ない印象をうけるが、当時のナップは個人的な実演農場をいくつもか抱えていて多忙であったことが影響しているそうである(Bailey 1971 p.150)。

その後、メキシコから飛来したゾウビ虫の大量発生による被害に農民協同実演事業でもって対処したことで、ナップの社会的評価は確立した。1906年からは、一般教育会(General Education Board)からの支援も受けようになり、エージェントの配置等も大きく進んだ(True 1928, pp.60-62)。この頃から、ナップは農民協同実演事業に直接関連する論考を発表するようになる。そこには事業について次のような記述がみられる。「農民協同実演事業の目的は、農場ではたらく大衆の眼前にどこでも生産している一般的な作物のもっとも利益があがる生産方法を示しながら、実践的な実物教授をおこなうこと、また、実演に積極的な参加を保障することで農民が非常に大きな収穫をあげられることと、自分が払った労力により大きな見返りが保障されると証明することである。」(Knapp 1908, p.1, Knapp 1909, p.1) これは、ナップが農民協同実演事業について述べた

1908年、1909年の論考に2年連続で登場していることから、事業の公式な定義とみなしてよいだろう。

南部農民の様子をナップがどのように捉えていたのかについては、例えば、「実演事業をはじめ前、南部において、普通の農民は、種の選別にほとんど注意を払っていなかった。トウモロコシが春に貯蔵箱から出され、たくさんの綿花が綿繰り機から出され、試験することもなくそのまま蒔かれていた。結果は、弱々しい木立となるだけであった。-状況は一向によくなるはずもない。」(Knapp 1909, p.155)という描写がある。また別稿では、「ある農民が、今年アラバマ州で開かれた公式の集会において次のように自分の考えを述べている。『私は綿花地帯で生まれ、40年以上今の農場で綿花を栽培してきた。その間、綿花の生産を増やす方法を私に教えてくれる人がいるなど、考えたことも無かった。いままでずっと、痩せた土地で1束の半分程の綿花を収穫していたが、それが1シーズンの収穫できる分のすべてだと思っていた。』」(Knapp 1908, p.10)と紹介している。このような中で、ナップは南部農民に対し、「自分に技術が身につけば収穫が増える」という結果を実感させることに徹した。

そこで何について実物教授をしようとしたのか、ナップの諸論で繰り返し述べているところからまとめると、主として、栽培する作物や品種に応じて、土を耕す方法、種の選別方法、灌漑について、肥料の性質と使用方法について、生産用の家畜について、農具について、農耕用の家畜について、といった内容が中心である(Knapp 1906, 1908, 1909, 1910)。ナップの技術水準について筆者は判断しかねるが、ナップの言い回しからは、基本的で確実に効果のあがる(と少なくともナップが考えている)知識や技術が紹介されている印象をうける。また、こういうことならば確かに目の前で見せてもらい、自分で実際にやりながら指導してもらう方が効果があがると思えることが多い。一例をあげれば、土の問題に関して次のように紹介している。「南部においては、より深く何度も耕すこと、輪作と腐葉土を入れた土で土壌を満たすこと、豆科の植物を植えて(緑肥とし)、苗が育つ土壌に作り変えること。これらによって、綿花、トウモロコシ、オート麦、小麦といった作物の平均生産量は容易に増大するし、干ばつあるいは日照不足を克服し、気候条件が悪い年でも収穫を保障することにつながるだろう」(Knapp 1906, pp.116-117)。こうしたナップの実践は基本の徹底と言い換えることもできよう。

結果を出すことが南部の人にとってどれだけ必要なことなのかについて、ナップの考えは、1910年に農業エージェントがナップに行ったインタビューの一節に表現されている。「君はこの事業の目的を農民の収入を増やすこと、彼等に生産量が倍増する方法を教えることだと思っているであろう。しかし、ちょっと立ち止まって考えてみなければ、この事業が究極的に目指すところはみえてこない。そこには、実演をするという以上に高次の使命がある。生産量の増大を目的とするのは、将来の財産につながるすべての基礎がそこにあるからだ。農民が独立できるようにならなければならない。」(Knapp 1910, p.7)

長年にわたって搾取される社会構造下に置かれた人びとが、どうすれば独立独歩できるようになるのか。そのことをナップは常々考えていた。そして、事業対象者のレディネスを考慮して教育内容をできる限り絞ったとき、最も有効な教育方法として選択されたものが実物教授の方式だったのである。後世において「農民協同実演事業における実演方式」に大きな注目が集まったのは、「現状の分析 - ねらいの設定 - 方法の選択」という一連の結びつきが的確であったことに要因があるようにも思える。

3. 「エージェント」システムを創始した問題意識

それでは、先述した農民協同実演事業の定義の最後の部分、すなわち、「自分が払った労力により大きな見返りが保障されると証明すること」について、ナップはどのように考えていたのだろうか。これについては、指導員として配置したエージェントに大きな期待を寄せていたようだ。エージェントの状況については、1908年の時点で、ナップが、連邦エージェントがひとり(ナップ)、州エージェントが10人、地区エージェント(district agent と local agent)が188人いると報告している。地区エージェントには、農業の実践家から選ばれて州のエージェントから教授活動に必要な情報が提供されている。定期的な州レベルの集会には連邦農務省からの専門官も出席する。農民に最も身近なレベルのエージェントから連邦農務省に向けて活動のレポートが提出され、必要なアドバイスがなされる。(Knapp 1908, p.9)

南部の貧農は小作人であるから、収穫の大部分が地主にとられ、自分たちには食べていく程度にしか残らない。しかし、技術改良によって収穫の絶対量が増してくれば、地主におさめてもなお、流通に乗るだけの余剰作物ができることになる。そうした、作物の流通による経済効果を高めるための活動は、ナップがエージェントに求めた役割であった。この点は、ナップが論考の中で取りあげた「地方エージェントからの報告の典型例」として紹介されている手紙によく雰囲気が出ている。やや長文であるが、以下に抜粋しておこう。(Knapp 1908, pp.17-18)

テキサス州 Giddings 1908年9月21日

拝啓：私の活動とビジネスマンとしての見本や精神的な支援をうけたことで、30機のクリーム分離機が近所の農民から買えました。2,000ドル以上を良質の乳牛に投資しましたが(1頭は400ドルの雄牛で、州の他の地域からわが郡へ船荷されてきました)、牛乳をコーヒーなどに入れるクリーマーに加工する技術を開発して、乳牛はおよそ一ヶ月当たり500ドルの価値を持つようになりました。郡内中の人々は冬の間の飼料作物の植付けをしていて、いろいろな情報について私を質問攻めにします。これらはみな、(廃棄)牛乳の処理をするための良質の子豚を確保しています。

クリームづくりが十分に軌道に乗ると、すぐに、乳製品の販売所の設置を二人のビジネスマンが買って出てきました。それも良いかとも思ったのですが、もう少し待とうと判断しました。今年の3月1日までは分離機もなかったわけですから。

ドイツ系農民の大多数は非常に質素で、彼らは良い畑を作ります。

この地区の土地は周囲を柵で囲まれています。面積の0.5パーセントほどが豚の牧場になっています。

トウモロコシは、1ブッシェルあたり40~50セントで売られていて、家畜用の干し草はまとまった量ごとに売っていて、1トンあたり5~10ドルです。人々が私に言うには、この年までは干し草で20ドル、トウモロコシで75セントという値段が支配的でしたが、これは改良された方法を用いるまでもなく気候に恵まれたためだろうと説明してくれました。トウモロコシや飼料作物に関する定期的な記事は種まきのころに文書で配布し、そのアドバイスを生かして、多くの人は、今、現金収入を得ています。かなりたくさんの方が自分の所有する馬車を増やし、設備を整え、追加の土地を買ったりしています。ただ、今年以前の活動の成果の話ですので、今年に関してこの地域で直接的に効果のあると言えることはまだありません。

おそらく、他のどんな話題より学校で達成されたすばらしいことがありました。夏季のノーマル・インスティテュートとティーチャーズ・インスティテュートの演説を通じて、また、直接学校に向かい分かったことですが、郡の人々の間での意識の高まりが目立ってきました。おそらくLee郡に農村学校はないままですが、給料が増え、設備が整い、学校の期間も延長されるでしょう。これは、いくつかの要因があわさった結果だと思われる。我々は施設を共有するためにそこに行っていました。Lee郡とWashington郡の1千の家庭から、この冬、人びとが(学校に)押し寄せるでしょう。みな農業紀要を脇に抱えています。いままでのテキサス州では教師が強制的に教えるための道具でしたが、これからは、農業を教える救いの手として教師が使用していくからです。Milam、Williamson、Fayette、Burlison、Bastropといった各郡でも、農業における教え子のためのこれらの紀要が求められるようになるでしょう。

二人のドイツ人が1頭につき3,000ドルかかる種馬と、ビルトモアのジャージー種の雄牛1頭を400ドルでつれて、Lee郡のリストに加えました。そして、2つの家畜の会社がすぐに買い手をケンタッキー州とテネシー州に送り、2頭の標準的な育ちの馬を500ドルで買いました。酪農用の家畜を群れて飼育し始めた農民は、1,500ドル以上の価値のする乳牛を買っていました。(牛の大半は郡外からきたものでした。)現在ここでは、どんな品質のミルクを出す乳牛でも高値で売れます。

私としては、トウモロコシや保存の難しい野菜の缶詰を作る技術を教えるような農民たち(男性も女性も含む)の学校を組織し、監督したことが非常にうれしく感じました。あるクラスなどは、Dime Boxという郡の西の端で開催されたこともあります。たくさん

関心が寄せられましたが4日だけしか滞在できませんでした。

できるだけ簡潔に述べると、この郡で我々が得た二次的な結果以外は、(以前の感じと)よく似た状況となりました。我々が活動してきた他の郡では改良の兆しが示されたが、ここではまだこれからです。

以上、実際に起こった出来事とまちの人と私が話したことがらの実態報告であります。
敬具

W. W.キャンベル

乳牛の購入やクリーム加工、あるいは、トウモロコシの売買のエピソードなどにみられるように、生産した商品の円滑な流通についてはエージェントが力を発揮していたようである。こうした実践が各地で一般的なものであったのか否かは別の検討が必要であるが、ナップが自らの論考にこの報告を掲載したのは、ここでのエージェントと農民の関係に自分の理想のイメージを重ねていたためであろう。彼は農村の将来を見据えたときの基礎教育の重要性を認識していたから、報告の中には学校や教育に関する話も織り込まれている。技術の高度化と機械化を進めれば労働時間を削減でき、農民たちも収入増大や生活向上のための活動に従事することが可能となるという彼の考え方(Knapp 1910, pp.2-3)が、ここでは具体例を通じて発信されているようにも受け取れる。

利益をあげるための基本は、経費を出来るだけ安く抑え、収穫物を売り切ることである。ナップは、農民に対する直接的な教育としては、前節で分析したように、実物教授による基礎技術の習得に的を絞っていた。しかし、これによって増産が達成されても、それだけでは、農民に増産をすれば「収入が増える」ことを実感させるという所期のねらいは達成されない。そのために必要とされる農村での経済的役割を誰がどのように果たせばよいのかという問題意識が、ナップをエージェントのシステムづくりに向かわせたように思われる。実際、ここで示されたエージェント・モデルが後世にも引き継がれていったわけであるから、ナップの先見性は評価されるであろう。ただし、黒人向けの教育にエージェントを活用するという発想は、19世紀の中葉から全国黒人代表者会議の中でも議論されていたという指摘がなされていて(成 2006) ナップも、比較的早い時期から黒人をめぐる動向の中にヒントを得ていたのかもしれない。

南部における黒人教育との関係でいうと、アラバマ州のタスキーギ学院等、新たに創設された黒人系の高等教育機関では拡張事業がおこなわれており(成 2000、2005) ナップが「バージニア州のハンプトン学院(Hampton Institute)学長であるH. B. フリッセル(H. B. Frissell)博士と、アラバマ州のタスキーギ学院(Tuskegee Institute)学長であるブッカー・T・ワシントン(Booker T. Washington)博士から主として影響を受けて、黒人向けの実演事業が始まった」と述べていることを指摘しておこう。ナップの1908年

の論考では、バージニア州で4人、アラバマ州で2人、ミシシッピ州で1人の黒人エージェントが任命されていたことが紹介されていて、黒人エージェントの中にはタスキーギ学院とハンプトン学院の卒業生、在学生在がいたという (Knapp 1908, pp.18-19)。

論考の中には、先の報告例と併記する形で地区エージェントがタスキーギ学院より送った報告が掲載されている。ちなみに、この例でエージェントとして記載されている T.M. キャンベル (Campbell, T. M.) は、ナップのプログラムで最初の黒人系のエージェントであった (スタブルフィールド、キーン 2007, p.172)。この報告も以下に提示しておこう。(なお文中の番号は原文のママ。)

アラバマ州タスキーギ学院 1908年9月23日

拝啓：(1)実演事業は急速に進展している。私の担当区域において集約的な農業技術を応用している農民は、少なくとも見積もって全体の 45 パーセントであるということを知って安堵している。

(2)担当区域の農民が所有する豚や牛の品種の質はこここのところ良くなっており、また、鳥についても、この2年間でこれまでにない品質のものとなってきた。品種改良について、以前に実演事業の取り組みを報告した際には、実施が農民全体の 25 パーセントに止まっていたが、現在では最低でも 35 パーセントまで到達している。こうした報告ができてほっとしている。

(3)ジェサップ・ワゴン (本事業のためにニューヨークにいるモリス・K・ジェサップ閣下から寄付された牽引用の馬と荷馬車) が実演事業において重要な役割を果たしている。これに私は、携帯用の飲食設備を取り付け、実演用の地図を見ながらいろいろな集会の会場に行き、そこで、この飲食設備の作り方についてまさに具体例を示しながら説明するのだ。(会場そばの) 商店主が、先日の商売の様子を私に知らせてくれた。なんでも、昨年は、この時期の3ヶ月でキャベツ、ジャガイモ、エンドウ、玉ねぎなどの食用の野菜がよく売れて、1908年の現時点での総売上よりも多かったということだ。これは、毎回の集会で農民たちがよりよい飲食設備を作ろうとしていることとも関連していると思われる。

(4)担当区域では、放牧して家畜に牧草を食べさせている率が非常に低い。その理由は、農民たちが一般に、作物を作っている間にそれを集めて「束ねて」しまったあとに家畜を放しているということがある。実演事業が始まる以前は、家畜の放牧を行っているのは 10 パーセントほどであった。現在は 12 パーセントになっている。

(5)担当区域の農民たちが、トウモロコシや干し草についての古くて決まりきった購入方法を見直し始めた。これは、耕作の時期に収入が減るという困難を切り抜けるためだ。実演事業が導入される以前は、季節を通じてトウモロコシの収入だけで持ちこたえられた農民の数は、平均で 7 パーセントほどの低さだったという。現在では約 12 パーセントになっている。

(6)小規模の農家たちが、借金から抜け出す方法において注目すべき改善策を示している。アラバマ州のタスキーギに住むある農民が私に、自分は昨年はいじめて借金から抜け出したと言った。彼によれば、種々の農民集会に参加したおかげだそうだ。特に、アラバマ州の Notasula で開かれた集会では、バターや卵、野菜をたくさん売って、お店で必需品を買った。そうすることで、値上げ分の料金として請求された分を節約していた。借金を返した農民は10パーセント程である。

(7)農耕用の馬の数はそれほど多くない。というのは、大原則として、小農家は非常に良質なラバや牛を保持しようとする傾向があり、それは、農場経営に重要な他の事柄を犠牲にしてでも行おうとする。しかし、道具や農場機械を使って大きな成果を残す場合も増えてきており、少なくとも28パーセントの農家では、そうした経験がある。

(8)担当区域における農村学校の状況は大きく改善してきてはいるが、私が直接関わった学校は、大体において、平均的なところよりもいくらか良くなっていると思う。昔の綿花の品種に大いに刺激を受けて、街中の人々が現在まで新しい種子を求めつづけてきた。アラバマ州 Cross Keys の E. W. ワシントンさんと B. W. ワシントンさん(ともに実演者)は、役所で紹介された種子から9月7日までに20梱以上の綿花を収穫した。アラバマ州 Warriorstand の ジャクソン・ドナーさんは、私に、地区の人がみな自分から綿花を買うか、借りうけるかしようとして頼みに来てと言っていた。

(9)私は実演事業に従事して以来、地区の人々に家畜の改良に取りくむように熱心にはたらきかけてきた。ジェサップ・ワゴンをつくったのも、パークシャーやポーランド、中国の豚だとか、ジャージー種、ショートホーン種の子牛など、最良の家畜を農民の集会にもっていき、改良法を示すことが目的である。農民たちが寄りよい家畜を買っていくと、私は非常に喜ばしい。特に、タスキーギ学院他からのパークシャー種の豚などであればひとしおである。

(10)農民たちは大量の果物や野菜を缶詰にしている。たいていの農民集会においては、我々は家庭で作る野菜や果物の缶詰について展示してきた。これに従事する農家は40パーセントに達している。

(11)地域の集会で知ったことだが、ふつうは、検査委員会があちこち回って、家庭についての批評をするということである。そのため、我々は、家を建てた農民がそれまで知らなかったような漆喰の塗り壁にしようとしていれば、その前に漆喰塗りについての体験者を探そうにしている。

(12)道路を整備したり電信を引いたりすることの効果が大いなることはいまさら言うまでもないが、私の地区では、ここ2年間、それまでよりも郵便箱を多く設置してきた。優秀な農民が農務省からの郵便物を受け取りやすくするための。

(13)借地人がどの程度農場を購入してきたかが次第に明らかになってきた。私が思い出した例では、実演事業で回っていない場所において、借地人が、農務省による農業教育を

受けるという利点を得るために、私の担当区域内で農場を購入できる可能性について情報を探していたということがある。

T. M.キャンベル(地区エージェント)

おわりに

アメリカ合衆国の成人教育史について研究したグラットン(Grattan, C. H.)は、ナップの農民協同実演事業の影響を受けて後世の拡張事業に備わった特徴のひとつに「Co-operation」をあげ、教育的にもその他の面でも大学が連邦、州、郡の三つのレベルの政府、さらには、地方の団体や組織と協同関係を構築している点を指摘している(Grattan 1971, p.206)。その認識に大きな間違いはないが、この点は基本的には政府との接点がない一般大学拡張との比較というところに視点を広げたときに、農業拡張の特徴として浮かび上がってくるものである。しかし、政府との協同関係といえ、国有地付与大学の農学部の場合は農業拡張事業の制度化以前にも何らかの形で構築されていたケースも少なくない。そのため、制度化にあたって「協同」というタームが使用された意義は、農業拡張事業の展開に関する前後関係の中で考察してみると、別の点に求めることもできるように思う。

それは何かといえ、農業拡張事業が、抑圧にさらされ教育的な素地をもたない貧農を対象にした活動を包摂することになったということではないだろうか。ナップの目から制度化以前に北部を中心に展開した農業拡張事業をみれば、貧農に対する「対象分析とニーズへの対応」が未だ不徹底であったようにうつついていた。その精神が農民協同実演事業に反映されていて、ナップの死後におけるスミス・レーバー法制定の協議過程においても、一時期、大学側と連邦農務省側は対立的な関係に陥ったのである。その後、両者の主管事業を統一した際に「協同」のタームを使用することになったのは、貧農対策にこれまで以上に尽力するという大学側の意向の現われであるようにもみえる。

それにしても、アメリカ農業拡張事業は、農民協同実演事業のような批判的なカウンターパートにあたる事象と、歴史の中でぶつかり合い、次のステージではそれを包摂していくという動きをとるところが非常に興味深い。

最後に、ナップのアイデアが彼の大学人としてのキャリアを踏まえて実質的には南部の実践の中で形成されてきたことに着目すると、黒人エージェントに対するナップの思想の内実とその歴史的な位置づけなど、明らかにしなければならない課題は多い。スタブルフィールドらの指摘によれば、ナップは当初、黒人エージェントの雇用を躊躇したとのことであるが(スタブルフィールド、キーン 2007, p.171) このあたりが今後の手掛かりになるであろう。

参考文献

- Bailey, J. C. (1971), *Seaman A. Knapp Schoolmaster of American Agriculture*, Arno Press & New York Times.
- Boyd, A. H.(1953), *A Record of the First Demonstration Farm, and the Events That Resulted in the Demonstration Method of Teaching, Now Known Throughout the World as the Extension Service*, Terrell Transcript 1903 on Record in Carnegie Public Library.
- Bull, N. H., Cote, L. S., Warner P. D., McKinnie, M. R.(2004), “In Extension for the 21st Century?” *Journal of Extension*, vol.42, no6. (電子ジャーナル : <http://www.joe.org/journal-archive.php>)
- Grattan, C. H.(1971), *In Quest of Knowledge A Historical Perspective on Adult Education*, Arno Press & The New York Times.
- Knapp, S. A.(1885), “The Limits of Education, Under The Low at Our Agricultural Colleges”, *USDA Special Report*, no.9, pp.163-168.
- Knapp, S.A.(1906), “Farmers' Cooperative Demonstration Work in Its Results”, *Proceedings of the Ninth Conference for Education in the South*, The Executive Committee of the Conference, pp.113-128.
- Knapp, S.A.(1908), “Farmers' Cooperative Demonstration Work in Its Relation to Rural Improvement”, *USDA Bureau of Plant Industry Circular* No.21, pp.3-20.
- Knapp, S. A.(1909), “The Farmers' Cooperative Demonstration Work”, *USDA Yearbook*, pp.153-160.
- Knapp, S. A.(1910), “The Mission of Cooperative Demonstration Work”, *USDA Office of The Secretary Circular*, No. 39.
- Martin, O. B. (1941), *The Demonstration Work Dr. Seaman A Knapp's Contribution to Civilization*, The Naylor Company.
- Peters, S. J.(2002), “Rousing The People on the Land: The Roots of the Educational Organizing Tradition in Extension Work”, *Journal of Extension*, vol.40, no3. (電子ジャーナル : <http://www.joe.org/journal-archive.php>)
- Pigg, K. E.(1983), “Shade of Seaman Knapp”, *Journal of Extension*, vol.21, no.4. (電子ジャーナル : <http://www.joe.org/journal-archive.php>)
- True, A. C.(1928), *A History of Agricultural Extension Work in The United States*, United States Government Printed Office.
- Westwood, G. R.(1973), “Seaman A. Knapp: Won't You Please Come Home?” *Journal of Extension*, vol.11, no.3, pp.35-41.

- A.C.トウルー著、吉武昌男訳(1950)『合衆国における農業エクステンション・ウワークの歴史』農林省農業改良局。
- 小池源吾、佐藤進(2004)「高等教育機関と成人教育者」日本社会教育学会編『成人の学習と生涯学習の組織化』(講座 現代社会教育の理論) 東洋館出版社、pp.246-262。
- 佐々木保孝(2001a)「S.A.ナップの農業教育論」中国四国教育学会編『教育学研究紀要』第47巻、第一部、pp.328-333。
- 佐々木保孝(2001b)「L.H.ベイリーの農業拡張論」『広島大学大学院教育学研究科紀要』第三部(教育人間科学領域)第50号、pp.93-100。
- 佐々木保孝(2005)「アメリカ農業拡張事業におけるエージェントの役割」『日本社会教育学会紀要』No.41、pp.31-39。
- 佐々木保孝(2007)「アメリカ合衆国における農学の進展と農業拡張事業 - 19世紀末の「農民読書コース」における教材提供の原理 - 」『日本社会教育学会紀要』No.43、pp.21-30。
- 成玖美(2000)「タスキーギ学院における農業拡張制度化過程」東京大学大学院教育学研究科生涯学習基盤経営コース『生涯学習・社会教育学研究』第25号、pp.1-10。
- 成玖美(2005)「タスキーギ学院におけるエクステンション活動」名古屋市立大学大学院人間文化研究科『人間文化研究』第3号、pp.43-56。
- 成玖美(2006)「全国黒人代表者会議にみる教育観 - アンデベラム期アメリカ北部の黒人指導者たち - 」名古屋市立大学大学院人間文化研究科『人間文化研究』第5号、pp.101-115。
- ハロルド・W・スタブルフィールド、パトリック・キーン著、小池源吾、藤村好美監訳(2007)『アメリカ成人教育史』明石書店。